

日本語・フランス語の諸相対照研究

— フランス語の特色を中心として —

今田良信

0. はじめに

ドイツの有名な作家, Johann Wolfgang von Goethe(1749-1832) には, 彼のことばとされる¹⁾, “Wer fremde Sprache nicht kennt, weiß nichts von seiner eigenen.” 「外国語を知らない者は, 自分自身の言語についても何も知らないのだ。」という名言がある。また, 古浦(2008)では, 「ある言語の特色を論ずる場合, 当該言語だけを見ていたのでは特色は分からない。やはり, ほかの言語と比較してこそ特色は抽出できるものと思われる。」と述べられている。

本稿では, 今田(2009)で扱った25項目の基準(パラメータ)について²⁾, 現代日本語と現代フランス語を対照することによって, 両者の共時的相違を明示しつつ, 特に後者の特色を詳述することを目的とする。今田(2009)では, 「歴史言語類型論」という枠組みでの古フランス語と現代フランス語の「対照」が主眼であったため³⁾, 現代日本語についても現代フランス語についても十分に述べる紙幅が無かったため, その補足もしておきたい。なお, 本稿は筆者が本務校の大学で行った授業⁴⁾の講義内容をもとに検討・加筆・修正したものである。

1. 比べる基準について

安藤(1987)では, 英語を比較の対象として, 23項目の基準について, 必ずしも現代語だけについて述べているとは言えない箇所があるものの, 現代日本語の類型論的な「特質」が挙げられている。また, 古浦(2008)では, 安藤の基準に1つ追加して, 24項目の基準について, 日本語を比較の対象とした現代イタリア語の類型論的な「特色」が挙げられている。さらに, 今田(2009)では, もう1つ25番目の基準が加えられている。本稿でもこの25項目の基準について, 現代日本語と現代フランス語の対照を行う。

また, 本稿においても, 今田(2009)と同様に, 筆者の判断に基づいた便宜的な次の3つの判断基準の印を添えて示すことにする⁵⁾。

◎印: 巨視的にも微視的にも概ね共通すると判断される場合

○印: 巨視的には共通すると見なされるが微視的には相違する事例が散見される場合

●印：巨視的に（従って微視的にも）相違する場合

2. 現代日本語と現代フランス語の特色の対照

本節以降では、特に必要が有る場合を除いて、現代日本語は単に日本語、現代フランス語は単にフランス語と称する。なお、必要に応じて※印の後に筆者の解説などを付すこととする。印が、※だけのものは一般的説明、※[JP]は日本語に関する説明、※[FM]はフランス語に関する説明である。

1. 語頭に子音が2つ（以上）来るかどうか。

●日本語は語頭に子音が2つ（以上）来ないが、フランス語も語頭に子音が2つ（以上）来る。

※[FM]例えば、*croître* 「増加する」、*splendeur* 「豪華さ」

2. /r/音で始まる語があるかどうか。

◎日本語にもフランス語にも/r/音で始まる語がある。

※[JP]本来の日本語である大和言葉には語頭の/r/音は存在しなかったとされる。ロシアのことを昔オロシアと言ったのも語頭の/r/音を避けようとする現象であり、現代語の/r/音始まりの語が何れもヨーロッパ語や漢語などからの借用語であることもその証拠であるとされるが、語頭の/r/音は存在しないという指摘は、現代語について共時的には当てはまらない。

※[FM]例えば、*rose* 「薔薇」、*rouge* 「赤い」

3. 母音調和(harmonie vocalique)が有るかどうか。

◎日本語にもフランス語にも母音調和が無い。

※[JP]古期日本語である上代日本語には母音調和が認められると言われており、現代語にもその痕跡⁶⁾と考えられるものは残っているものの、いわゆる母音配列上の制約という現象としては当てはまらない。

4. 開音節(syllabe ouverte)が基本的であるかどうか。

●日本語は開音節が基本的であるが、フランス語には開音節と閉音節があって開音節構成への頻度的好みがありはするが、どちらか一方が基本的とは言えない。

※安藤(1987)では日本語について、古浦(2008)ではイタリア語について、同じ表現で「開音節が基本的である」としているが、筆者は、「基本的」の基準が異なっていると判断したため、今田(2009)において、「○日本語もイタリア語も開音節が基本的である。」とし、印は◎にはせず、○とした。なぜなら、日本語では音節末に撥音と促音が来る場合以外はすべて開音節であるのに対し、イタリア語では、頻度的には開音節がはるかに優勢であるので古浦(2008)のような記述になったと考えられるが、*an-ti-co*, *con-trat-to*, *cor-po*⁷⁾などのように閉音節も散見され、日本語のように規則的に開音節が基本的なわけではないからである。

※[FM]フランス語では、例えば、mar-cher「歩く」は、2音節から成っており、最初の音節は綴り字上も発音上も閉音節、後の音節は綴り字上は閉音節で発音上は開音節ということになる。鈴木、他(1992), p. 1933によれば、「フランス語では開音節が76%にのぼり、〔中略〕(Delattreによる)、フランス人は「開音節構成(syllabation ouverte)」を好むのである。」とあるが、これも頻度上の問題であり、規則上基本的というわけではないので、上述のような判断となった。印が●となっているのは、日本語における開音節の頻度は不明であるがそれに関わらず、巨視的なレベルで相違があると認められるからである。

5. モーラ(more)言語か音節言語か。
 - 日本語はモーラ言語であるが、フランス語は音節言語である。
6. 母音の長短が音韻的に対立するかどうか。
 - 日本語は母音の長短が音韻的に対立するが、フランス語は対立しない。
 - ※[FM]倉方、他(2000), p. 1530には、「フランス語にも母音の長短はあるが、日本語の/tori/(鳥)と/to:ri/(通り)のように、それによって意味の違いが起こることはない。フランス語の母音の長さは各単語に固有なものではなく音声環境(アクセントの有無、母音の種類、後続子音の有無と種類)によって自動的に決まる。」とある。
7. 冠詞が有るかかどうか。
 - 日本語には冠詞が無いが、フランス語には有る。
 - ※[FM]冠詞の区分として、定冠詞・不定冠詞・部分冠詞が存在する。
8. 名詞・代名詞に文法的性が有るかかどうか。
 - 日本語には名詞・代名詞に文法的性が無いが、フランス語には有る。
 - ※[FM]文法的性として、男性・女性の区別が存在する。
9. 文法的な数が有るかかどうか。
 - 日本語には文法的な数が無いが、フランス語には有る。
 - ※[FM]文法的な数として、単数・複数の区別が存在する。
10. 関係詞が有るかかどうか。
 - 日本語には関係詞が無いが、フランス語には有る。
 - ※[FM]関係詞として、関係代名詞qui, que, lequell, 関係副詞dont, oùなどが存在する。
11. S, V, Oによる基本語順はどうか。
 - 日本語はSOV言語であるが、フランス語はSVO言語である。
 - ※[FM]Wartburg(1971), p. 257には、フランス語の現状について、"Tout le monde sait que la structure de la phrase française, en particulier l'ordre des mots, est d'une grande rigidité. Dans la phrase *le père punit le fils* seule

la place des deux subst. indique les rapports dans lesquels ils se trouvent. Le français ne peut donc pas échapper à la loi qui veut que le sujet des phrases contenant un régime précède le verbe, et que le régime le suive.”

「誰もが知っているように、フランス語の文の構文、とくに語順は極めて厳密に固定されている。《Le père punit le fils.》「父は息子を罰する」という文では、2つの名詞の位置だけが、それらの名詞が置かれている関係を示している。したがってフランス語は、被制辞〔=上記例文では目的語〕を含む文の主語〔S〕が動詞〔V〕に先行し、被制辞〔O〕が動詞に後続するという法則の適用を免れない。」⁸⁾
〔 〕内は筆者による補足。以下同様）とある。

12. 主要語〔=被修飾語〕と修飾語の語順はどうか。

●日本語では「修飾語＋主要語」の語順になる。フランス語では「主要語＋修飾語」の語順が原則である。但し、「修飾語＋主要語」の語順も用いられる。

※[FM]品質形容詞の付加形容詞としての位置について、佐藤、他(1991), p. 95には、
「フランス語では、形容詞がその本来の働きをしている時、即ち、名詞のあらゆる事物について、同種の他のものと異なる性質(*la ligne droite*直線/ *la ligne courbe*曲線)や、置かれている状態(*la branche cassée*折れた枝)を示している時は、名詞の後に置かれる。言い換えれば、形容詞の原則的位置は名詞の後である。」と述べられている。但し、*bon*, *mauvais*, *grand*, *petit*, *jeune*, *vieux*, *beau*, *joli*, *gros*, *long*, *haut*などは、古くからの慣用によって主要語の前に置かれる。しかし、これらの形容詞も主要語の後に置くことはできる場合があり、その際は、それなりの意味(あるいはニュアンス)の差が生じる。例えば、*un homme grand* 「背の高い男」: *un grand homme* 「偉人」; *un visage jeune* 「若々しい(若く見える)顔」: *un jeune visage* 「若い(人の)顔」

13. 前置詞を用いるか後置詞を用いるか。

●日本語では後置詞(=助詞)を用いる。フランス語では前置詞を多用するが、但し、後置詞も若干用いられる。

※[FM]フランス語についての後半の記述は、位置だけを問題にするなら、前置詞と同じ(語形の)語が、品詞としては副詞に区分されるものの、後置詞的に用いられる例はあるということである。例えば、*Il était(sera) parti trois jours avant.* 「彼は〔その〕3日前に出発していた(いるだろう)」⁹⁾

14. 動詞の変化は如何なる方法で示されるか。

●日本語では動詞の変化は膠着法(*agglutination*)によるが、フランス語では屈折法(*inflection*)による。

※[FM]語根に語尾が付されて活用する。但し、綴り字上は語尾が付されているものの、発音上は語尾が磨滅して発音されず同じになり、人称や数の区別ができないため、

主語人称代名詞が不可欠で、事実上動詞の変化の一部を成している場合が多い。例えば、j'aime「私は愛する」、tu aimes「君は愛する」、il aime「彼は愛する」〔基準23の説明も参照のこと〕。

15. 所有構文(=「XがYヲ持ツ」型)を用いるか、存在構文(=「XニYガアル」型)を用いるか。

●日本語では存在構文が用いられるが、フランス語では所有構文が用いられる。

※[FM]例えば、「彼には友人が大勢いる」という存在構文は、フランス語では、Il a beaucoup d'amis。「(直訳)彼は大勢の友人を持っている」という所有構文になる〔いずれも下線部筆者。以下同様〕。

16. 比較構文〔における「比較の対象」、「比較級の補語」〕に何が用いられるか。

●日本語では比較構文に助詞を用いるが、フランス語では接続詞(que)または前置詞(à)が用いられる。

※[FM]例えば、Il est plus grand que son père。「彼は父親より背が高い」、また、それ自体にすでに比較の意味を含んでいる形容詞では、比較の対象である第2項は à で導かれる。例えば、Ce roi est antérieur à Louis V。「この王はルイ5世 より前の人だ。」¹⁰⁾

17. 疑問文が何でマークされるか。

●日本語では疑問文は助詞でマークされるが、フランス語では(1)音調(文尾を上げる)〔=抑揚〕、(2)文頭のest-ce que、(3)倒置のいずれかによってマークされる¹¹⁾

※[FM]全体疑問文(疑問詞を伴わない疑問文)について、今田(2010b)¹²⁾によれば、「これは、文全体を対象とする疑問文であり、以下の3つのタイプが見られる。

①平叙疑問タイプ：平叙文の文尾を上げる音調(=抑揚)によって表現される。

(1)Vous parlez français?〔「あなたはフランス語を話せますか。」〕 ②Est-ce que 疑問タイプ：文頭にEst-ce que(qu')をつけることによって表現される。抑揚は文尾を上げなくても良い。(2)Est-ce que vous parlez français?〔意味は(1)に同じ〕 ③倒置疑問タイプ：主語と動詞を倒置して表現される。(3)Parlez-vous français?〔意味は(1)に同じ〕〔中略〕口語では、①、②をよく使い、③は少し堅く、改まった感じで、書きことば中心の表現とされる。」とある。

18. 左枝分かれ構造の言語か右枝分かれ構造の言語か。

●日本語は左枝分かれ構造の言語であるが、フランス語は右枝分かれ構造の言語である。

※[FM]例えば、C'est le train ~~qui va à Paris~~。「これはパリへ行く列車です」における主要語le trainに対して限定修飾節〔網かけ部〕は主要語の右側に位置している。

19. 動詞が前向きに空所化されるか後ろ向きに空所化されるか。

●日本語では動詞は後ろ向きに空所化されるが、フランス語では前向きに空所化される。

※[FM]例えば, J'ai deux amis. L'un vit à Paris et l'autre, ø à Nancy. 「私には2人の友人がいる。1人はパリに ø, もう1人はナンシーに住んでいる。」においては, ø 印の箇所が空所化されている¹³⁾。

20. 疑問詞が文頭に置かれるかどうか。

○日本語では疑問詞は必ずしも文頭に置かれるわけではない。フランス語でも必ずしも文頭には置かれるとは限らない。

※[JP]安藤(1987), p.10によれば, 「日本語では, 動詞の左側にあるかぎり、どこに生じてもしつかえない。」と述べられている。例えば, 「何を太郎は買ったのですか。」あるいは「太郎は何を買ったのですか。」は差し支えないが, 「*太郎は買ったのですか何を。」は容認できない。

※[FM]部分疑問文(疑問詞を伴う疑問文)について, 今田(2010b)によれば, 「文の要素のうち1つを対象とする疑問文で, 以下の4つのタイプが見られる。用いられている記号は, S:主語, V:動詞, K:疑問詞を示す。①平叙疑問タイプ: S+V+K? 疑問詞の抑揚を上げて発音する。(5) Ton cousin habite où? [「きみのいとは何処に住んでるの。」] [中略] ②強調疑問タイプ (est-ce qui/est-ce que (qu') 疑問タイプ): K+est-ce qui/est-ce que (qu')+S+V...? 抑揚は文尾を上げない。(10) Qui est-ce qui chante? [「誰が歌っているんだろう。」] [中略] ③倒置疑問タイプ: K+V+S...? 抑揚は文尾を上げてもしなくても良い。(16) Que mange-t-il? [「彼は何を食べるのだろう。」] [中略] ④間接疑問タイプ: K+S+V...? [中略] 文頭の疑問詞の抑揚は上げてもしよいが, 文尾の抑揚は上げない。(25) Combien ça coûte? [「これいくら。」] [中略] 以上のうち, ③は改まった言い方で, 書きことばでよく用いられ, ②は口語で用いられ, ①と④は口語の中でもくだけた言い方になると指摘されている。」とある。印が○としてあるのは, フランス語では, ①のタイプのように, 疑問詞が動詞の右側に位置する場合もあるからである。

21. 自動詞で構成される「迷惑の受け身」が存在するかどうか。

●日本語には自動詞で構成される「迷惑の受け身」が存在するが, フランス語には存在しない。

※[JP]安藤(1987), p.11によれば, 「自動詞で作るいわゆる“迷惑の受け身”は, 日本語に特有の構文とされる。」とある。例えば, 「母に死なれた」, 「雨に降られた」, 「犬に吠えられた」など。

22. 数量詞(quantitatif)を副詞的に用いるかどうか。

●日本語では数量詞を副詞的に用いるが, フランス語では副詞的には用いない。

※[JP]安藤(1987), p. 11によれば, 「日本語の数量詞は, 副詞的に用いるのが基本的である。」とある。例えば, 「私は本を2冊買った。」ないし「私は2冊(の)本を買った。」

※[FM]例えば, 「私は本を2冊買った。」は, *J'ai acheté deux livres.*のように, 「(直訳) 2冊の本を」となる。

23. 主語(人称)代名詞が省略されるかどうか。

●日本語では主語代名詞は省略されるが, フランス語では省略されない。

※[JP]安藤(1987), pp. 12-13によれば, 「日本語では, 談話の当事者(=話し手と聞き手)を表す人称代名詞は表現されないのが規範(norm)である。〔中略〕先行文に主語が表現されていれば, 後行文では, その主語と同一指示的な(=同じ事物を指す)主語は省略されるのが規範(norm)である。」とある。例えば, 「もう食べたのか。— うん, もう食べた。」, 「太郎はできるかな。— もちろん, できるさ。」

※[FM]佐藤, 他著(1991), p. 156によれば, 「主語(主格)人称代名詞は動詞の主語としてしか用いられず, また, 動詞は名詞(・名詞相当語句)を主語としている場合を除き, 必ず主語人称代名詞を先立てる。たとえば, *aimais*は1人称(*j'aimais*)でも, 2人称(*tu aimais*)でもありえ, また, *aimais*, *aimait*, *aimaient*の発音が, いずれも同一であることがそれを示すように現代フランス語の動詞の変化は, それのみでは人称(時に性・数)を明示しえないからである。この意味で, 主語人称代名詞は, その本質において, 動詞の変化の一部をなす「活用の代名詞」(*pronom de conjugaison*)と考えてよい。」とあり, さらに「古語では, 活用語尾が発音されていたため, それのみで十分に人称を示しえたから, 主語代名詞は, 特に主語を強調する時以外は, 用いないのがふつうであった。」と述べられている。

24. 高さアクセント(*accent de hauteur*)を用いているか強さアクセント(*accent d'intensité*)を用いているか。

●日本語は高さアクセントを用いているが, フランス語は強さアクセントを用いている。

※[FM]倉方, 他編(2000), p. 1529によれば, 「フランス語ではアクセント(強勢)の位置が固定している。ひとつひとつの単語を独立して発音する場合は, その語の最終音節にアクセントが置かれる。アクセントのある音節(の母音)は他の音節よりもやや強く長めに発音される」とある。なお, 亀井, 他(1992)の「フランス語」の項のp. 786には, 「古典ラテン語の高低アクセントは, 俗ラテン語では, 3世紀から6世紀の間に強弱アクセントへと変化した」とあるように, 古フランス語の段階で既に強さアクセントであったと考えられている。

25. 名詞・代名詞について文法範疇としての格(*cas*)が有るかどうか。

◎日本語には文法範疇としての格が無く, フランス語にも無い。

3. まとめと課題

以上、25項目の基準（パラメータ）のうち、先ず、類型上の共通点から挙げてみたい。

- (1)◎印、すなわち日本語とフランス語の間で巨視的にも微視的にも概ね共通すると判断されるものは、2, 3, 25の3項目（項目数全体の12%）である。2について、/r/音で始まる語がある、3について、母音調和が無いというのは、日本語が、また、25について、文法範疇としての格が無いというのは、フランス語が、それぞれ歴史的に変化した結果である点が興味深い。
- (2)○印、すなわち巨視的には共通すると見なされるが、微視的には相違する事例が散見されるものは、20の1項目（項目数全体の4%）である。具体的に言えば、巨視的には、両言語とも必ずしも疑問詞が文頭に置かれるとは限らない点は共通しているが、微視的に見ると、日本語では疑問詞が動詞の左側にないと容認されないのに対し、フランス語では動詞の右側にあっても容認されるという点が相違していることになる。
- (3)●印、すなわち巨視的に（従って微視的にも）相違するものは、上記(1), (2)に現われる2, 3, 20, 25の4項目を除く21項目（項目数全体の84%）である。しかし、日本語とフランス語の類型上の相違点である●印のものが項目数全体の8割越えることについては、系統的にも地理的にも全く繋がりのない両言語間のことであるので、当然と言えば当然のことであると言えよう。

なお、今回は日本語・フランス語対照という視点から、特にフランス語の特色について詳しく見てきたわけであるが、これにフランス語・英語対照、あるいはフランス語・イタリア語対照の視点を加えて比べてみれば、さらに興味深い発見があることと思われる。因みに、フランス語・英語間で、この25項目について巨視的ないし微視的に相違する（すなわち●ないし○印の）項目は、4, 7, 8, 12, 13, 14, 16, 17, 20の9種（項目数全体の36%）に見られるが、古浦(2008), p.300によれば、イタリア語・英語間で相違している項目数は、4, 8, 12, 13, 17, 23の6種であると指摘されており、前者の方がより多いことが分かるが、こういった点についても次稿に譲りたい。

注

- 1) 出典については、現在のところ、筆者の調べた限り不明である。
- 2) 今田(2009)では、安藤(1987)と古浦(2008)を参考にし、それに修正を加えて25項目のパラメータを立てた。詳しくは、今田(2009), pp.1-4を参照のこと。
- 3) 「歴史言語類型論」という用語については、今田(2009), p.1;今田(2010a), p.31を参照のこと。また、「対照」と鉤括弧がついているのは、この用語が、同一言語内の2つの共時態（体系）である古フランス語と現代フランス語の間のような通時的関係ではふつう用いられるものでなく、これも筆者の用語である「歴史対照言語学」という枠組みで用いているものだからである。この用語についても今田(2009), p.1を参

照されたい。

- 4) 2010年度後期(金・7/8 時限)に広島大学文学部の欧米文学語学・言語学プログラム(言語学分野)の授業として行われたもので、授業科目名は「対照言語学演習A・B」である。授業はオムニバス形式で、担当者氏名(所属)および講義題目(同じ題目で各担当者が2回ずつの講義を行った)は次の通り:〔50音順〕五十嵐陽介(広島大学/文学研究科)「ロシア語・日本語対照研究」, 犬塚優司(島根県立大学)「中国語・日本語対照研究」, 今田良信(広島大学/文学研究科)「フランス語・日本語対照研究」, 植田康成(広島大学/文学研究科)「ドイツ語・日本語対照研究」, 古浦敏生(広島大学名誉教授)「イタリア語・日本語対照研究」, 佐藤道雄(広島大学/非常勤講師)「アラビア語・日本語対照研究」, 深見兼孝(広島大学/国際センター・国際協力研究科)「韓国語・日本語対照研究」。
- 5) 但し, 「巨視的(視点・パラメータ)」, 「微視的(視点・パラメータ)」とは, 元々, ある言語の共時態を観察する際の「言語を捉える上での大きな網目」, 「言語を捉える上での小さな網目」のことであるが, 今田(2009), (2010a), (2010b)では, それを同一言語内の2共時態(体系)間の「通時的」対照(注3参照)に援用している(詳しくは, 今田(2010a), pp. 31-32を参照のこと)。しかし, 本稿では, 現代日本語と現代フランス語という異なる2言語間における, 本来の「共時的」対照の意味で用いられていることに注意されたい。
- 6) 安藤(1987), p. 2 によれば, atama, karada; kokoro, tokoro などの事例が挙げられている。
- 7) 菅田(1974), p. 43, 池田, 他(1983), p. 1664参照。
- 8) 訳文は田島, 他訳(1976)による。
- 9) 鈴木, 他(1992), p. 141 参照。
- 10) 倉方, 他(2000), p. 1550および鈴木, 他(1992), p. 78参照。
- 11) 佐藤, 他(1963), pp. 64-65参照。
- 12) 今田(2010b)は, 既に受理されており, 掲載内容は確定しているが, 発行が遅れているので, 掲載ページは不明。
- 13) リーチ, 他(1976), p. 179 参照。

参考文献

- 安藤貞雄(1987):『英語の論理・日本語の論理 — 対照言語学的研究 —』, 大修館書店。
池田廉, 他(1983):『小学館伊和中辞典』, 小学館。
今田良信(2009):「フランス語歴史言語類型論の試み」, 『ニダバ』, 西日本言語学会(編), 38, pp. 1-10。
今田良信(2010a):「フランス語における言語構造の変換 — 歴史言語類型論の視点から

- 」, 『ニダバ』, 西日本言語学会(編), 39, pp.31-40.
- 今田良信(2010b) : 「歴史言語類型論的視点から見たフランス語の疑問文」, 『ロマンス語研究』, 日本ロマンス語学会(編), 43, 10p. [2011年刊行予定]
- 亀井孝, 他(1992) : 『言語学大辞典』, 第3巻(世界言語編 下-1), 三省堂.
- 倉方秀憲, 他(2000) : 『プチ・ロワイヤル仏和辞典〔改訂新版〕』, 旺文社.
- 古浦敏生(2008) : 『日本語・イタリア語対照研究』, 文流.
- 佐藤房吉, 他(1963) : 『フランス文法小辞典』, 駿河台出版社.
- 佐藤房吉, 他(1991) : 『詳解フランス文典』, 駿河台出版社.
- 菅田茂昭(1974) : 『現代イタリア語入門』, 大学書林.
- 鈴木信太郎, 他(1992) : 『新スタンダード仏和辞典』, 大修館書店.
- ポール・リーチ(1976) : 『現代フランス語法辞典』, 大修館書店.
- Wartburg, Walther von(1971): *Evolution et structure de la langue française*, 2^e éd., Bern: Francke Berne. [田島宏, 他訳『フランス語の進化と構造』, 白水社, 1976]